

幼児の体格及び運動能力に関する研究(第4報)

— 居住地域別にみた体格・運動能力と生育・摂食・運動状況について —

A Study on Physique and Ability in the Physical Exercises of Infant Part IV:

Regional Differences of the Relationships between Infants' Physique, Ability in the Physical Exercises and the Conditions of their Development, Eating Habits and Physical Exercises

(1993年4月7日受理)

藤井 栞

Shiori Fujii

Key words: 幼児, 体格及び運動能力, 居住地域

研究目的

子どもの体格や運動能力の発達に関係する要因は多数あるが、現代っ子の生活をみると、かつての好ましい環境要因が失われたり減少したりしている実態が数多くみられる。即ち、近年においては、子どもの成長・発育に直接関係する遊び場としての空き地・野原等の減少、車利用による歩行の減少、テレビ・ファミコン等の普及による屋外遊びの減少、遊びを共有する子どもの数の減少、塾通いによる遊び時間の減少等が著しい。その上に、女性就労のしわ寄せで鍵っ子生活を余儀なくされる子どもの増加や加工食品の利用増加による食生活の変化等、子どもの生活環境には阻害要因がますます増えている。そのために身体の発育及び運動能力の伸び悩み、または、生活リズムのくずれを起こす子どもの発生等、複雑にして深刻な発達阻害問題が生まれている。

筆者はこの点に注目し、昭和53年に幼児の体格及び運動能力と、それにかかわる保育上の要因に関する実態を調査して報告^{1) 2) 3) 4)}したが、その後も生活環境の好転はみられない。そこで、子どもの体格及び運動能力は、さらにどのように変化しているのか、それを追及する目的をもって11年経過した平成元年に再び調査をして考察を試み、既にその一部を報告したところである。

即ち、本研究第1報⁵⁾においては、幼児の生育状況並びに生活時間が体力及び運動能力にどのような影響を及ぼしているかをみたところ、出生順位・出生時体重・屋外遊び時間・TV視聴時間が有意な関連を示したこと、第2報⁶⁾においては、家庭での摂食状況のうち、食欲・朝食の摂取状況・家族との共食状況が有意な関連を示したこと、第3報⁷⁾では、地方都市においても過密狭小化や中・高層化が進む住居環境と、その環境の中での運動状況を把握し、居住階数・広場の有無・運動の好き嫌い・遊ぶ友達の人数等が、幼児の体格や運動能力に有意な影響を及ぼしているという実情を報告したのである。

本4報においては、都市人口のドーナツ現象によって極端に園児数が減少した旧市街地域に存在する幼稚園と、ベッドタウンとして人口が急増する新市街地域に存在する幼稚園と、過疎化が進む農漁村地域に存在する幼稚園の園児を対象として、それぞれの居住地域の生育・摂食・運動状況を把握し、園児の体格及び運動能力にどのような影響を及ぼしているかについて考察を試みたものである。

研究 方 法

1. 調査対象

岡山県岡山市内7幼稚園の4～6歳児
370名で、内訳は表1のとおりである。

2. 調査時期：平成元年10月～12月

3. 調査事項

- 1) 体格 (①身長 ②体重) の測定
- 2) 運動能力 (①20m走 ②立幅とび ③テニスボール投げ) の測定
- 3) 生育状況 (①出生順位 ②出生時体重 ③出生時身長 ④乳児期栄養法 ⑤既往症の有無)
- 4) 摂食状況 (①毎日の食欲 ②毎日の朝食 ③家族共食 ④偏食の有無 ⑤間食の回数)
- 5) 運動状況 (①屋外遊び時間 ②TV視聴時間 ③睡眠時間 ④運動の好き嫌い ⑤遊ぶ友だちの人数 ⑥運動教室へ通室の有無 ⑦居住家屋 ⑧居住階数 ⑨広場の有無 ⑩遊園地の有無)

4. 調査方法

体格と運動能力の測定については、協力の得られた7幼稚園に測定要領⁸⁾と記録用紙を示し、教職員に測定並びに記入を依頼した。生育・摂食・運動の各状況については、体格・運動能力を測定した園児の保護者に、協力園を通じて質問紙を配布し回答を求めた。

5. 調査用紙の配布数及び回収数

配布数377枚、回収数371枚、うち有効回答数370枚、有効回答率は98.1%である。

表1. 対象人数内訳 (単位：人)

地域	年齢	4歳	5歳	6歳	計
旧市街		12	49	34	95
新市街		32	111	46	189
農漁村		13	37	36	86
計		57	197	116	370

結 果

I. 体格及び運動能力

体格は、原田碩三の楕円判定法⁹⁾に基づき、個々の成績を身長では+3 (極めて高い)、+2 (高い)、+1 (やや高い)、0 (ふつう)、-1 (やや低い)、-2 (低い)、-3 (極めて低い) の7区分に、体重では+3 (肥満型)、+2 (肥え型)、+1 (やや肥え型)、0 (均斉型)、-1 (やや痩せ型)、-2 (痩せ型)、-3 (るい瘦型) の7区分に分類した。

また、運動能力も、同じく原田碩三の回帰評価法¹⁰⁾に基づき、+3 (極めて良い)、+2 (良い)、+1 (やや良い)、0 (ふつう)、-1 (やや劣る)、-2 (劣る)、-3 (極めて劣る) の7区分に分類した。それを測定種目別に分類集計すると表2のとおりである。

1. 身長：「やや高い」が最も多く34.8%，次いで「ふつう」32.7%，「やや低い」14.9%，「高い」12.7%，「低い」2.4%，「極めて高い」2.2%と続き、「極めて低い」が0.3%で最も少なかった。
身長の平均値は0.46であり、今回測定した5種目のうち最も高い数値であった。
2. 体重：「均斉型」が最も多く37.5%，「やや痩せ型」27.0%，「やや肥え型」22.2%，「肥え型」5.4%，「やや痩せ型」4.6%，「肥満型」3.0%と続き、「るい瘦型」が0.3%で最も少なかった。
体重の平均値は0.05で測定5種目のうち最も低い数値であった。
3. 20m走：「やや良い」が最も多く40.0%，「ふつう」39.7%，「やや劣る」11.1%，「良い」5.7%，「劣る」2.4%，「極めて劣る」0.8%と続き、「極めて良い」が0.3%で最も少なかった。

表2. 体格及び運動能力成績

測定種目	成績	-3	-2	-1	0	+1	+2	+3	M
		n	%	n	%	n	%	n	
身長	n	1	9	55	121	129	47	8	0.46
	%	0.3	2.4	14.9	32.7	34.8	12.7	2.2	
体重	n	1	17	100	139	82	20	11	0.05
	%	0.3	4.6	27.0	37.5	22.2	5.4	3.0	
20m走	n	3	9	41	147	148	21	1	0.34
	%	0.8	2.4	11.1	39.7	40.0	5.7	0.3	
立幅とび	n	1	14	52	144	138	19	2	0.13
	%	0.3	3.8	14.1	38.9	37.3	5.1	0.5	
テニスボール投げ	n	0	22	91	138	83	27	9	0.08
	%	0	6.0	24.6	37.3	22.4	7.3	2.4	

20m走の平均値は0.34で、運動能力3種目のうち最も高い数値であった。

4. 立幅とび：「ふつう」が最も多く38.9%、「やや良い」37.3%、「やや劣る」14.1%、「良い」が5.1%、「劣る」3.8%、「極めて良い」0.5%と続き、「極めて劣る」が0.3%で最も少なかった。

立幅とびの平均値は0.13で20m走に次いで2位の数値であった。

5. テニスボール投げ：「ふつう」が最も多く37.3%、「やや劣る」が24.6%、「やや良い」22.4%、「良い」7.3%、「劣る」6.0%、「極めて良い」2.4%と続き、「極めて劣る」は0%であった。

テニスボール投げの平均値は0.08で、運動能力のうち最も低い数値であった。

II. 居住地域別にみた体格及び運動能力

1. 居住地域と体格：居住地域3群（旧市街地域・新市街地域・農漁村地域）と身長・体重の測定成績5区分とをクロス集計してみると表3のとおりで、それをグラフ化すると図1～図2となる。

表3. 居住地域別にみた体格

地域	成績	身長					体重				
		-3~-2	-1	0	+1	+2~+3	-3~-2	-1	0	+1	+2~+3
旧市街	n	1	14	41	28	11	5	23	40	21	6
	%	1.0	14.7	43.2	29.5	11.6	5.3	24.2	42.1	22.1	6.3
新市街	n	7	25	58	71	28	10	62	67	35	15
	%	3.7	13.2	30.7	37.6	14.8	5.3	32.8	35.4	18.5	8.0
農漁村	n	2	16	22	30	16	3	15	32	26	10
	%	2.3	18.6	25.6	34.9	18.6	3.5	17.4	37.3	30.2	11.6
χ^2 検定		P<0.30					P<0.20				

- 1) 身長（図1）：農漁村地域には背の「高い～極めて高い」児と「やや低い」以下児が多く、旧市街地域には背の「ふつう」児が多く「高い～極めて高い」児が少ないという傾向がみられた。
- 2) 体重：（図2）：新市街地域には「やや痩せ型」児が多く、農漁村地域には「やや肥え型」以上児が多く「やや痩せ型」が少ないという傾向がみられた。

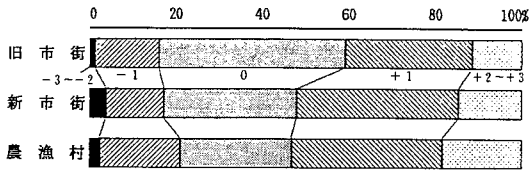


図1. 居住地域：身長

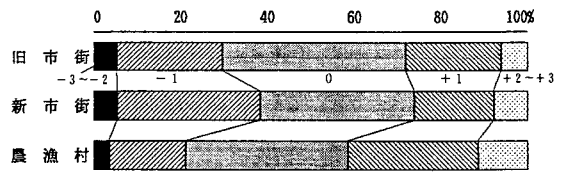


図2. 居住地域：体重

2. 居住地域と運動能力：居住地域3群と20m走・立幅とび・テニスボール投げの測定成績5区分とをクロス集計してみると表4のとおりで、それをグラフ化すると図3～図5となる。

表4. 居住地域別にみた運動能力

運動能力 成績	20 m 走					立幅とび					テニスボール投げ				
	-3~-2	-1	0	+1	+2~+3	-3~-2	-1	0	+1	+2~+3	-3~-2	-1	0	+1	+2~+3
旧市街	n 2	11	31	42	9	4	9	41	38	3	2	23	35	22	13
	% 2.1	11.6	32.6	44.2	9.5	4.2	9.5	43.1	40.0	3.2	2.1	24.2	36.8	23.2	13.7
新市街	n 8	27	97	57	0	8	25	65	77	14	17	56	74	29	13
	% 4.2	14.3	51.3	30.2	0	4.2	13.2	34.4	40.8	7.4	9.0	29.6	39.2	15.3	6.9
農漁村	n 2	3	19	49	13	3	18	38	23	4	3	12	29	32	10
	% 2.3	3.5	22.1	57.0	15.1	3.5	20.9	44.2	26.7	4.7	3.5	14.0	33.7	37.2	11.6
χ^2 検定	P<0.001					P<0.20					P<0.001				

- 1) 20m走 (図3)：新市街地域には20m走の成績の「ふつう」児が多く「良い～極めて良い」児は皆無であり、農漁村地域には成績「やや良い」以上児が多く「やや劣る」児が少なかった。
- 2) 立幅とび (図4)：新市街地域には立幅とびの成績の「やや良い」以上児が多く、農漁村地域には成績の「やや劣る」児が多く「やや良い」以上児が少ないという傾向がみられた。
- 3) テニスボール投げ (図5)：農漁村地域にはテニスボール投げの成績の「やや良い」以上児が多く、新市街地域には成績の「劣る～極めて劣る」児が多く「やや良い」以上児が少なかった。

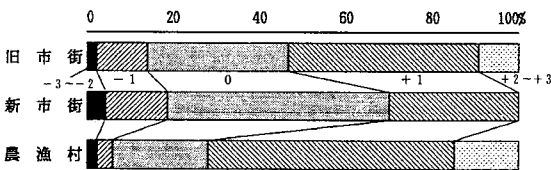


図3. 居住地域：20m走

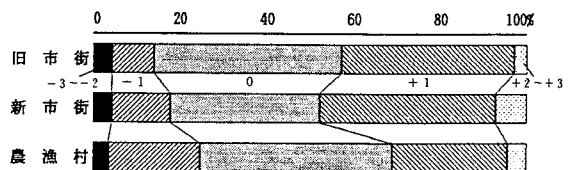


図4. 居住地域：立幅とび

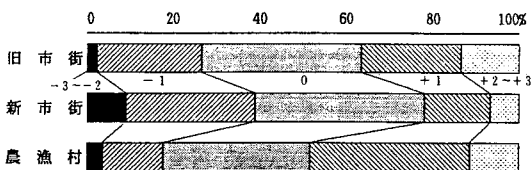


図5. 居住地域：テニスボール投げ

3. 居住地域と体格・運動能力の平均値比較

表5. 居住地域別体格・運動能力平均値比較

居住地域別に5種目の平均値を算出すると表5のとおりである。

種目 地域	身長	体重	20m走	立幅とび	テニス ボール投げ	5種目平均
旧市街	0.38	0.02	0.47	0.28	0.25	0.28
新市街	0.49	-0.07	0.07	0.34	-0.17	0.13
農漁村	0.50	0.34	0.80	0.09	0.43	0.43

1) 旧市街地域：身長

の平均値が0.38で、3地域のうち最下位であった他は、体重0.02、20m走0.47、立幅とび0.28、テニスボール投げ0.25で、いずれも3地域のうち2位であり、5種目平均値も0.28で農漁村に次いで2位であった。

2) 新市街地域：立幅とびの平均値が0.34で3地域中1位、身長が0.49で2位の他は、体重-0.07、20m走0.07、テニスボール投げ-0.17といずれも3位であり、5種目平均値0.13も最下位であった。

3) 農漁村地域：立幅とびの平均値が0.09で3地域のうち最下位の他は、身長0.50、体重0.34、20m走0.80、テニスボール投げ0.43で、4種目ともに1位であった。また、5種目平均値も0.43で3地域のうち第1位であった。

Ⅲ. 居住地域別にみた生育・摂食・運動状況

1. 居住地域と生育状況：居住地域3群と生育状況5項目12群（出生順位3群・出生時体重2群・出生時身長2群・乳児期栄養法3群・既往症2群）とをクロス集計すると表6のとおりで、居住地域と生育状況間に有意差が認められたのは、乳児期栄養法のみであった。

表6. 居住地域別生育状況

地域 生育状況	総数		旧市街		新市街		農漁村		χ ² 検定
	n	%	n	%	n	%	n	%	
出生順位									N.S.
第1子	148	40.0	39	41.1	79	41.8	30	34.9	
第2子	152	41.1	40	42.1	74	39.2	38	44.2	
第3子以上	70	18.9	16	16.8	36	19.0	18	20.9	
出生時体重									N.S.
3000g未満	124	33.5	30	31.6	66	34.9	28	32.6	
3000g以上	246	66.5	65	68.4	123	65.1	58	67.4	
出生時身長									N.S.
49cm未満	116	32.0	30	32.6	64	34.2	22	26.5	
49cm以上	246	68.0	62	67.4	123	65.8	61	73.5	
乳児期栄養法									P<0.05
母乳	175	47.4	52	54.7	77	41.0	46	53.5	
人工	44	11.9	7	7.4	31	16.5	6	7.0	
混合	150	40.7	36	37.9	80	42.5	34	39.5	
既往症									N.S.
ある	57	15.4	14	14.9	30	15.9	13	15.1	
ない	312	84.6	80	85.1	159	84.1	73	84.9	

◎ 乳児期栄養法

図6にみられるとおり、新市街地域には他の2地域に比して、「人工栄養」で育った児が多かった。

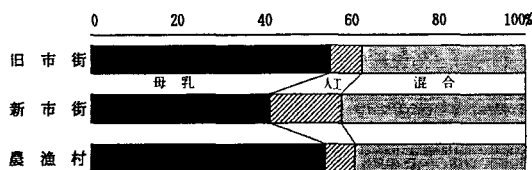


図6. 居住地域：乳児期栄養法

2. 居住地域と摂食状況

居住地域3群と摂食状況5項目13群（毎日の食欲3群・毎日の朝食3群・家族共食3群・偏食2群・間食の回数2群）とをクロス集計すると表7のとおりで、居住地域と家族共食・間食回数間に有意な傾向がみられ、それをグラフ化すると図7～図8となる。

表7. 居住地域別摂食状況

地域	総 数		旧市街		新市街		農 漁 村		χ^2 検定
	n	%	n	%	n	%	n	%	
生育状況									
毎日の食欲									N.S.
よく食べる	102	27.6	22	23.2	51	27.0	29	33.7	
ふ つ う	233	63.0	63	66.3	122	64.6	48	55.8	
あまり食べない	35	9.4	10	10.5	16	8.4	9	10.5	
毎日の朝食									N.S.
食べている	308	83.2	77	81.0	156	82.5	75	87.2	
時々食べない	57	15.4	15	15.8	31	16.4	11	12.8	
殆ど食べない	5	1.4	3	3.2	2	1.1	0	0	
家族と一緒に									P < 0.20
食べている	231	62.8	62	65.3	116	62.1	53	61.6	
時々食べない	114	31.0	26	27.4	56	29.9	32	37.2	
殆ど食べない	23	6.2	7	7.3	15	8.0	1	1.2	
偏 食									N.S.
あ る	224	60.5	59	62.1	114	60.3	51	59.3	
な い	146	39.5	36	37.9	75	39.7	35	40.7	
間食の回数									P < 0.10
2回以内	323	87.3	77	81.1	171	90.5	75	87.2	
3回以上	47	12.7	18	18.9	18	9.5	11	12.8	

- 1) 家族共食 (図7) : 家族と一緒に「殆ど食べない」児が農漁村地域に少ない傾向がみられた。
- 2) 間食回数 (図8) : 「3回以上」児が旧市街地域に多く新市街地域には少ない傾向がみられた。

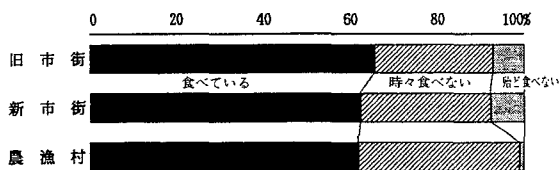


図7. 居住地域：家族共食

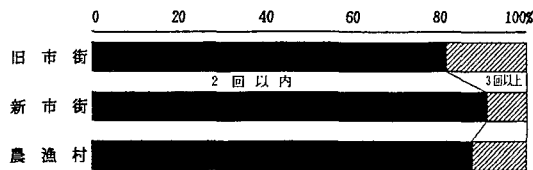


図8. 居住地域：間食の回数

3. 居住地域と運動状況：居住地域と運動状況10項目24群（屋外遊び時間2群・TV視聴時間2群・睡眠時間2群・運動の好き嫌い3群・遊ぶ友だちの数3群・運動教室通室2群・居住家屋2群・居住階数3群・広場の有無2群・遊園地の有無2群）とをクロス集計すると表8のとおりで、そのうち有意差もしくはその傾向が認められた項目をグラフ化すると図9～図16となる。

表8. 居住地域別運動状況

地域 運動状況	総 数		旧 市 街		新 市 街		農 漁 村		χ ² 検定
	n	%	n	%	n	%	n	%	
屋外遊び時間									N.S.
3時間未満	287	77.8	75	78.9	145	77.1	67	77.9	
3時間以上	82	22.2	20	21.1	43	22.9	19	22.1	
TV視聴時間									P<0.05
3時間未満	337	91.6	81	85.3	179	94.7	77	91.7	
3時間以上	31	8.4	14	14.7	10	5.3	7	8.3	
睡眠時間									P<0.30
10時間未満	122	33.4	30	31.6	57	30.6	35	41.7	
10時間以上	243	66.6	65	68.4	129	69.4	49	58.3	
運動の好き嫌い									P<0.30
好き	195	53.4	57	60.6	95	51.0	43	50.6	
ふつう	157	43.0	33	35.1	87	46.8	37	43.5	
嫌い	13	3.6	4	4.3	4	2.2	5	5.9	
遊ぶ友達の数									N.S.
0～1人	47	12.9	10	10.9	25	13.3	12	14.5	
2～3人	244	67.2	60	65.2	131	69.7	53	63.8	
4人以上	72	19.9	22	23.9	32	17.0	18	21.7	
運動教室への通室									P<0.001
通っている	82	22.3	34	36.2	41	21.7	7	8.3	
通っていない	285	77.7	60	63.8	148	78.3	77	91.7	
居住家屋									P<0.001
平屋建	72	19.7	5	5.4	42	22.2	25	29.8	
2階建	233	63.7	48	51.6	126	66.7	59	70.2	
アパート・マンション	61	16.6	40	43.0	21	11.1	0	0	
居住階数									P<0.05 (旧・新市街のみ)
1～2階	30	49.2	15	37.5	15	71.4	—	—	
3～4階	19	31.1	15	37.5	4	19.1	—	—	
5階以上	12	19.7	10	25.0	2	9.5	—	—	
広場の有無									P<0.05
あ	234	63.4	50	52.6	124	65.6	60	70.6	
ない	135	36.6	45	47.4	65	34.4	25	29.4	
遊園地の有無									P<0.001
あ	148	40.1	63	66.3	71	37.6	14	16.5	
ない	221	59.9	32	33.7	118	62.4	71	83.5	

- 1) TV視聴時間(図9)：「3時間以上」視聴する児は旧市街地域に多く新市街地域に少なかった。
- 2) 睡眠時間(図10)：農漁村地域には「10時間未満」児が多い傾向がみられた。
- 3) 運動の好き嫌い(図11)：旧市街地域には運動の「好き」な児が多い傾向がみられた。
- 4) 運動教室への通室(図12)：「通っている」児は旧市街地域に多く農漁村地域には少なかった。
- 5) 居住家屋(図13)：「アパート・マンション」居住児は旧市街地域に多く、農漁村地域にはみられなかった。
- 6) 居住階数(図14)：「3～4階」・「5階以上」居住児は、いずれも旧市街地域に多かった。
- 7) 広場の有無(図15)：「ある」児は農漁村地域に多く旧市街地域には少なかった。
- 8) 遊園地の有無(図16)：「ある」児は旧市街地域に多く農漁村地域には少なかった。

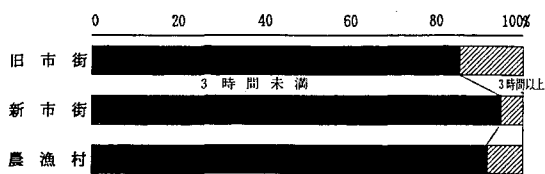


図9. 居住地域：TV視聴時間

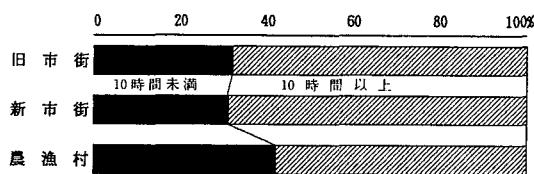


図10. 居住地域：睡眠時間

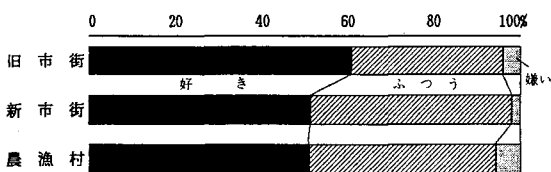


図11. 居住地域：運動の好き嫌い

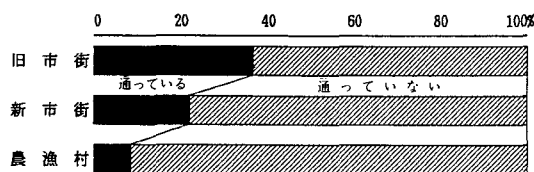


図12. 居住地域：運動教室への通室

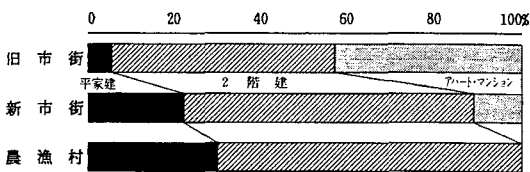


図13. 居住地域：居住家屋

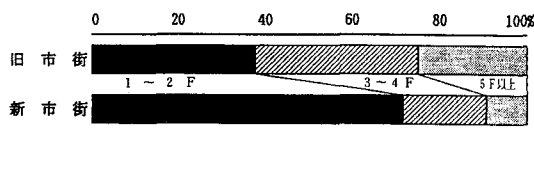


図14. 居住地域：居住階数



図15. 居住地域：広場の有無

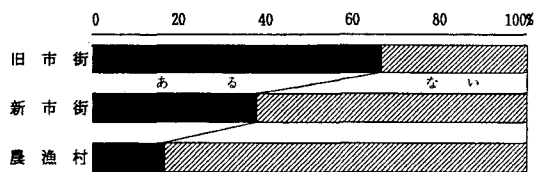


図16. 居住地域：遊園地の有無

考 察

近来、子どもたちのからだに表れる発達上の歪みは、子どもを取り巻く現代社会の家庭及び地域の環境にある阻害要因によって生みだされるものといわれている。しかし、その事態は悪化の一途をたどり、発達上の歪みがここ11年前よりさらに増大していることを既報の本研究第1～第3報で報告した。

その間、子どもたちが居住する地域の様相も大きく変動して地域特徴に相違が生じ、その状況変化が子どもの心身の発達にも影響を及ぼしているものと考えられる。

その点に注目して、今回は市の中心地である旧市街、ベッドタウンの新市街、過疎地の農漁村に居住する子どもたちの体格及び運動能力の比較検討を行った。その結果は、周辺にまだ自然も相当残っているうえに切磋琢磨して育ち合える園児数が多い新市街地域に居住する子どもたちの体格・運動能力の測定平均値が、最も劣っているという意外なものであった。一方、最も好成績だったのは農漁村地域で、立幅とびが3位であった他は、身長・体重・20m走・テニスボール投げ全て1位であった。

それぞれの地域における生育状況・摂食状況・運動状況等に何らかの相違があるかどうか比較してみると、生育状況においては「出生順位」・「出生時体重」・「出生時身長」・「既往症」のいずれも3地域間に有意な差はみられなかった。しかし、「乳児期栄養法」では有意差が認められ、体格や運動能力の成績平均値が最も低い新市街地域には、母乳栄養で育った児が最も少ないことがわかった。近年育児用粉乳の改良はめざましいが、乳児期栄養の原則は何と云っても母乳であることを証明していると言えよう。

居住する地域によって、子どもの摂食状況に相違がみられるかどうか興味深いところであったが、今回の調査では、「食欲の有無」・「朝食をきちんと食べるか否か」・「偏食の有無」の3項目については、居住する3地域間に有意な差はみられなかった。しかし、「家族と一緒に食事をしているか否か」については有意な傾向がみられ、体格や運動能力の平均値が最も高かった農漁村地域には、家族と一緒に「殆ど食べない」という児が最も少なかったのである。農漁村地域は他の2地域に比べ三世代同居の家庭が多く企業戦士的な父親は少ないであろうと推察されるから、家族が揃って食卓を囲み、とりたての野菜や魚を調理して楽しく食事をするということが、子どもの心身の発達に好影響を及ぼしているのではないかと考える。原田は「幼児の健康に貢献する第1因子は、親の理念・行動・体質」¹⁴⁾と言っているが、それを肯定する結果がでたと言えよう。

運動状況と居住地域との関連については、相互間に最も顕著な相違があるものと予想したが、事実そのとおり調査した10項目のうち8項目に有意差もしくはその傾向がみられた。即ち体格・運動能力の優れていた農漁村地域には、アパート・マンションに住んでいる児は皆無で、遊園地は少ないが家の周囲に遊べる広場が多く、運動教室へ通っている児が最も少なかった。

筆者は11年前の調査結果¹²⁾から、アパート・マンションの3～5階に居住する児は立幅とびの優れている児が多いことを報告したが、今回も、アパート・マンションの3階以上に居住するものの最も多かった旧市街地域においては、立幅とびの成績が劣るという児が少なかった。一方、アパート・マンション居住児が皆無であるため、3階以上の高階数に居住するものも当然なかった農漁村地域において、他の4種目では成績が1位であるにもかかわらず、唯一立幅とびの劣る児が最も多く成績が最下位であったという結果をみると、日常生活の中で階段の昇降を繰り返すことが、子どもの跳力を伸ばすことに関わっていることはまず間違いないものと考えられる。

本研究第3報において、運動教室へ通室しているものに身長の高い児・体重の痩せ型児・投力の劣る児が有意に多かったことを報告¹³⁾したが、今回は運動教室へ通室している児の最も少ない農漁村地域の体格・運動能力成績が最も優れているという結果を得た。また、これより別に筆者らが行った『保育学生の体力と生育環境・生活技能に関する研究』¹⁴⁾においても、幼児期・学童期に運動系の習いごとをした保育学生の体力が、劣っているという同様の結果を得ている。最近では、幼児期から運動教室へ通わせ

る親が増えているが、スポーツ教室等での規定のプログラムが必ずしも好結果を出していないという事実から、体力・運動能力の基礎を培うためには、適切な時期に適切な内容と方法で指導することの重要性が痛感された。

子どもたちの生育・摂食・運動状況を居住地域別にみた場合、旧市街地域に最も問題点が多く、その影響を受けて体格・運動能力も最も劣るであろうと予想した。確かに家族との共食が少ない、間食3回以上・TV視聴3時間以上児が多い、運動教室への通室児が多い、遊べる広場のない児が多い等、旧市街地域には問題点が最も多くみられたが、意外にも体格や運動能力平均値は最低ではなかった。

他方、間食回数2回以内・TV視聴3時間未満児が多く、運動の嫌いな児が少ない等の好ましい状況がみられたにもかかわらず、3地域中最下位の成績を示した新市街地域について、その原因をいろいろ考えてみたが、今回の調査では、この点を明確に把握することができなかった。しかし、新市街の地域環境と、旧市街または農漁村との地域環境を比べてみると、新市街地域においては、家庭相互の連帯感が稀薄であること、ひいては好ましい人間関係の構築がむずかしいことは否めない事実であるから、この環境がかもした有形・無形のストレスが、母乳の分泌や子どもの育ちに影響を与えているのではないかと懸念されるので、その点は今後の課題としたい。

要 約

岡山市内7幼稚園児（4～6歳）370名を対象として、体格（身長・体重）と運動能力（20m走・立幅とび・テニスボール投げ）の測定を行った。同時に対象児の居住地域と生育・摂食・運動状況を質問紙により調査し、それらの体格及び運動能力に及ぼす影響を考察して次のような結果を得た。

1. 測定した体格・運動能力5種目の成績平均値は、身長、走力、跳力、投力、体重の順に高かった。
2. 居住地域別に体格・運動能力5種目の成績平均値をみると、農漁村地域、旧市街地域、新市街地域の順に高かった。
3. 農漁村地域には、家族共食を「殆どしない」児・運動教室へ「通室している」児が有意に少なく、居住家屋が「平屋建」・遊べる広場が「ある」児が有意に多かった。
4. 旧市街地域には、家族共食を「殆どしない」児・間食回数「3回以上」児・TV視聴「3時間以上」児・運動教室へ「通室している」児・居住家屋「アパート・マンション」児・居住階数「3階以上」児が有意に多く、遊べる広場が「ある」児が有意に少なかった。
5. 新市街地域には、乳児期栄養法の「人工栄養」児・間食回数「2回以内」児・TV視聴「3時間未満」児が有意に多かった。

稿を終えるにあたり、体格・運動能力の測定とアンケート調査にご協力を賜りました、7幼稚園の園長先生並びに諸先生方に心から謝意を表します。

文 献

- 1) 藤井 葉：幼児の運動能力と身体活動時間の関係について 全国保母養成協議会第20回研究大会論文集（1981）

幼児の体格及び運動能力に関する研究(第4報)

- 2) 藤井 栞：4・5歳児の運動能力と、それにかかわる保育要素の実態について 中国短期大学紀要 第13号 P. 24~31 (1982)
- 3) 藤井 栞・澤津久司：住居環境と幼児の体格及び運動能力の関係について 日本保育学会第35回大会研究論文集 (1982)
- 4) 藤井 栞：幼児の体格及び運動能力の育成と諸要因について 中国短期大学紀要 第14号 P. 52~60 (1983)
- 5) 藤井 栞：幼児の体格及び運動能力に関する研究(第1報) —生育状況並びに生活時間の及ぼす影響— 中国短期大学紀要 第21号 P. 83~96 (1990)
- 6) 藤井 栞：幼児の体格及び運動能力に関する研究(第2報) —家庭における摂食状況との関係— 中国短期大学紀要 第22号 P. 135~147 (1991)
- 7) 藤井 栞：幼児の体格及び運動能力に関する研究(第3報) —住居環境・運動状況との関係— 中国短期大学紀要 第23号 P. 63~75 (1992)
- 8) 原田碩三：幼児の体格と運動能力 —その新しい評価法と指導— P. 103~105 北大路書房(1877)
- 9) 同上 P. 31~45
- 10) 同上 P. 80~101
- 11) 原田碩三：図説幼児健康学 P. 89 黎明書房 (1986)
- 12) 澤津久司・藤井 栞：地方都市における住宅・広場・遊園地と幼児の体格及び運動能力の関係について 土地住宅問題1月号 P. 47~52 住宅産業開発協会 (1983)
- 13) 藤井 栞：幼児の体格及び運動能力に関する研究(第3報) —住居環境・運動状況との関係— 中国短期大学紀要 第23号 P. 74 (1992)
- 14) 荒木恵美子・塩見優子・藤井 栞・三好敏江：保育学生の体力と生育環境・生活技能に関する研究 岡山県立短期大学研究紀要 第36巻 P. 213~223 (1991)
- 15) 正木健雄編：子どものからだは蝕まれている 柏樹社 (1990)
- 16) 佐野勝徳：子育て子育て生活リズム エイデル研究所 (1988)
- 17) 小川信子編：子どもと住まい —生活文化としての都市環境— 勁草書房 (1991)
- 18) 日本子どもを守る会編：子ども白書 —地域社会と子どもの権利— 草土文化 (1992)